

大学高等教育における 学術交流活動の意義

アラブ人学生歓迎プログラム（ASP）10年の軌跡

Significance of Academic Exchange Activity
in Higher Education
10-year Trajectory of Arab Student Welcome Program
(Ahlan wa Sahlan Program (ASP))

奥田 敦

慶應義塾大学総合政策学部教授

Atsushi Okuda

Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでアラブ・イスラーム圏との学術交流の試みの一つとして奥田敦研究会の活動の一環として行われ、2011年に10回目を迎えた「アラブ人学生歓迎プログラム（アハラン・ワ・サハラプログラム（ASP）」を取り上げ、その10年間の軌跡を振り返りながら、プログラムの成長と深化をたどり、10年目を契機として活動の理念を確認し、今後を展望すると同時に、大学高等教育においてこうした学術交流活動が有する意義について考える。

One of the activities of Prof. Okuda's Laboratory at Shonan Fujisawa Campus, Keio University, Ahlan wa Sahlan Program (ASP), Academic Exchange Program with Arab Islamic world has celebrated its 10th in 2011. This paper, while looking back the trajectory of its decade, tracing the growth and evolution of the program, reviewing its concept, as well as the future outlook, thinks about the significance of academic exchange activity like this in higher education.

Keywords: アラブ・イスラーム圏、学術交流、大きなわれわれ、ジハード、日本語学習

1 はじめに

2010年に20周年を昨年迎えた慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）に、2011年度で10回目を迎えた交流活動がある。2002年度から奥田敦研究室が開催してきた「アラブ人学生歓迎プログラム（アハラン・ワ・サハラプログラム（ASP）」である。アラブ諸国で日本語を学ぶ学生を約2週間SFCに

招待し、研究会（ゼミ）の活動の一環として、SFCでアラビア語を学ぶ学生たちと日本語レポート作成や日本語スキット映像の制作などを通じて行う、アラブ・イスラーム圏との学術交流プログラムである。10回の活動を通じて、アラブ6カ国から、48名のアラブ人を日本に招聘してきた〔図1, 2〕。日本人学生も加えると、全体で延べ300人を超える学生が

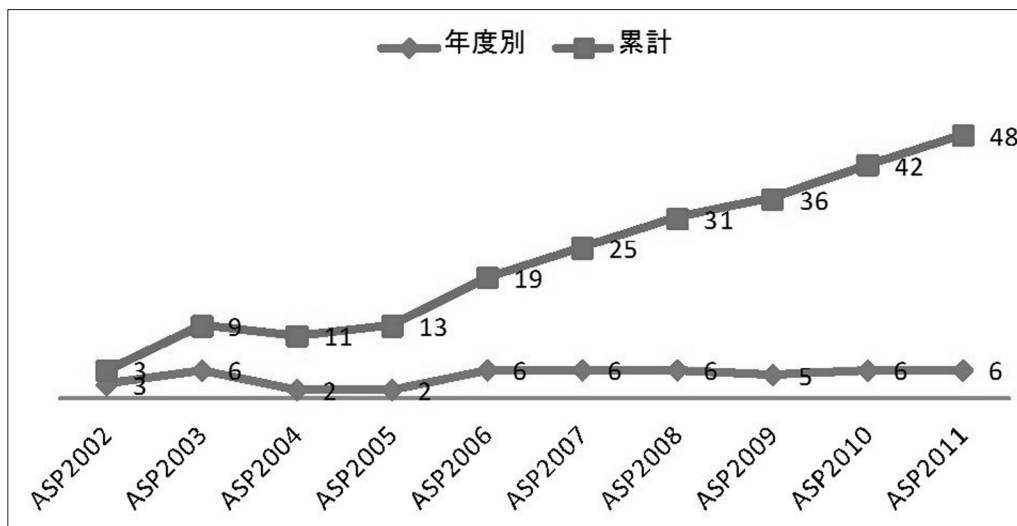


図1 ASP 招聘者数の推移

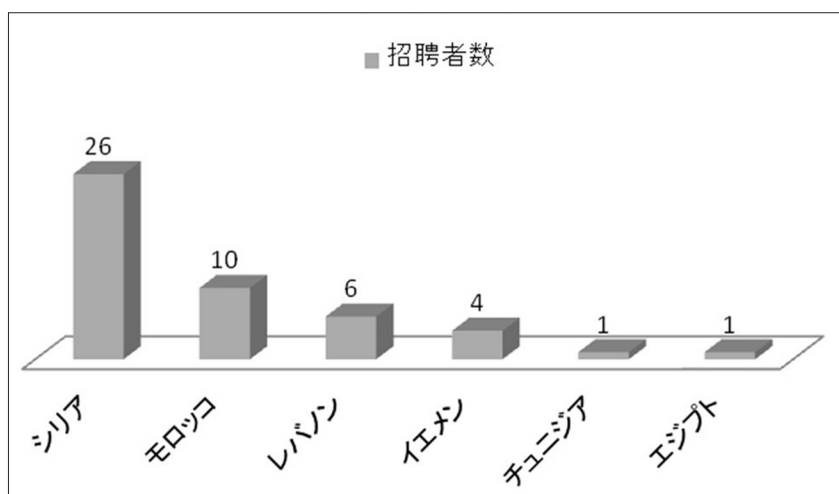


図2 ASP 国別招聘者数

関わってきたことになる〔表1〕。10回を振り返ってみると、そこには、大学高等教育における学術交流の一つのあり方が示されていると見ることもできる。

本稿では、このアラブ人学生歓迎プログラムの10年間の軌跡を追う。とにかく感謝の気持ちを表そうと招聘に一生懸命だった最初期から、「SFCから始まるジハード」という全体テーマを掲げて活動するようになった第10回までのプログラムの成長と深化をたどっていく。そして10年目を契機としてこの活動の理念を確認し、今後を展望すると同時

に、こうした学術交流活動が有する大学高等教育における意義について考えていきたい。

始まりは感謝の気持ち

2002年3月末、私は2週間のアラビア語研修とそれに引き続き約10日間にわたって行われたアラビア語教材ビデオ撮影の共同プロジェクトを終えた十数名のSFC生たちと共に、シリアの大地の闇をダマスカス空港へひた走るバスの中にいた。インテンシブと呼ばれる週4コマのコースを核とする先進的な外国語教育が6言語で展開されるSFCにおい

表1 ASP 実行委員数の推移と実行委員長および主たる助成団体
(学年は当時：敬称略)

ASP2002	7	植村さおり	総合2年	
ASP2003	24	植村さおり	総合3年	外務省
ASP2004	21	佐藤彩水	総合2年	国際交流基金
ASP2005	20	川上綾乃	総合2年	学術交流支援資金
ASP2006	22	代田七瀬	総合2年	国際交流基金
ASP2007	28	代田七瀬	総合3年	トヨタ財団
ASP2008	33	堂 有里	総合3年	トヨタ財団
ASP2009	42	滝川理紗	総合3年	慶應義塾大学未来先導基金
ASP2010	35	兼定 愛	総合3年	慶應義塾大学未来先導基金
ASP2011	32	佐野圭崇	総合3年	慶應義塾大学未来先導基金
合計	264	(ASP2005 は概数)		

て、アラビア語とイスラーム関係科目の立ち上げと担当を任されて3年。当時必修科目であったインテンスィブの2学期目を現地で行うこととして、開講にこぎつけたのは初めての海外研修の帰路であった。

アレppoを離れるときに力一杯に手を振って見送ってくれた現地の先生方、学生たちの熱い見送りの感動も冷めやらぬ車内で、シリア人を日本に呼ぼうという声が聞こえてきた。「シリアの人たち、特にチューターさんたちには本当にお世話になった。何とか御礼をしたい。自分たちがしてもらったのと同じことを彼らに日本でしてあげたい」という。話の輪に加わると、彼らはすっかりその気になって大いに盛り上がっている。

彼らが参加したこのコースは、午前中が教室での少人数授業、昼食をはさんで、夕方からは、シリア人学生チューターとのグループワーク、そして3日に1日の家庭訪問を日々のメニューとしていた。彼らが呼ぼうと言っているのは、夕方のグループワークに協力してくれた学生チューターたちである。グループワークでは、テーマを決めて街に出てもらいアラビア語の単語と例文を集めてもらった。ノルマは100個。しかしこの数を2週間で集めるのは容易なことではない。彼らは一応の終了時間など気にすることなく、時間を惜しまず、休日も含めてサポートしてくれたのである。どうしてこんなによくしてくれるのだろうか。たしかに客をもてなすことにおいて非常に手厚い人々ではある。しかしながら、日

本人の学生たちは、「いったい自分たちにこれほどのが出来るだろうか」とわが身に置き換え、おそらくかつてない感動を覚えていたのである。

アラブ人チューターたちはみな、わたしたちのプログラムの受入機関であるアレppo大学日本センターで日本語を学ぶ学生たちでもある。習いたての日本語と習いたてのアラビア語の2週間の真剣な学び合いが生み出したのが、日本人学生の側についていえば、感謝の気持ちであり、「彼らにもらったことを何とか今度は自分たちが日本でしてあげたい」という感謝の気持ちを形にしようという熱い思いだったのである。

しかしながら、そうやって盛り上がっている学生たちにわたしは「資金はどうするのか」と聞いてみた。すると即座に「自分たちで集めます!」という力強い答えが返ってきた。疲れているはずなのに実にすがすがしい。「彼らは本気である。これは素晴らしい。それならば、この感謝の気持ちを形に変えるプロジェクトを一緒に進めてみよう。」シリアに対して誰より世話になっているのは、外ならぬ私でもある。1993年から1999年までシリアに滞在し、アラビア語とイスラーム法、イスラーム神学などをアレppo大学アラブ伝統科学研究所の客員研究員として学ばせてもらい、かつ1995年に設立されたアレppo大学学術交流日本センターの初代の主幹として設立準備段階から関わらせてもらった。ほぼ月1回のペースで日本関係の講演会を行ったり、日

本語教室を開きそこで教えたりといった活動から始めたセンターであったが、Email もインターネットもない時代に日本の大学との交流は、思うようには進まなかった。シリアのアレッポ大学で定期的な研修を行うことは、もちろん正則アラビア語がよく保持されている土地柄であり、かつ環境が整っていることが第一であるが、自分が日本へ帰ったら、日本との持続的な交流を実現したいと思っていたことも事実であり、1999年4月に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスに赴任して以来、この研修の以前にもすでに2年続けてアラビア語教材に用いるビデオ撮影のために研究会のメンバーとシリア訪問を行っていた。こうした活動が、すでに自分にとっては、シリアに対する感謝の気持ちの表現としての側面があったが、シリアへ出かけた学生たちが今度は、日本への招聘プログラムの実施を通じて感謝の気持ちを表そうというのである。疲れきっているはずなのに本当に立派な提案である。

バスの中では、早速、「誰を呼ぼう、いつどんなふうに呼ぼう」とプログラムの構想が次から次に飛び出した。アラブ人学生歓迎プログラムの芽生えである。

2 アラブ人学生歓迎プログラム 10 年の歩み

(1) 第1期：第1回～第2回（ASP2002、ASP2003）

日本に帰ってすぐに新年度を迎えたが、学生たちの思いを正規の履修科目の一つとして生かしたいと考え、研究会（ゼミ）の活動の一環としてこれを行うこととし、シリア研修に参加した学生の中の有志6名たちを中心に、7月に2週間シリア人学生3名をキャンパスに招いて、プログラムを実施した。プログラムの名前は、「アハラン・ワ・サハラン・プログラム（Ahlan wa Sahlan Program:ASP）」。「アハラン・ワ・サハラン」とは、客などに対して歓迎の意を示すときに最もよく用いられる「ようこそ」にあたるアラビア語のフレーズで、「家族のようにくつろいで」という意味を持つ。日本語名は、シリア人学生歓迎プログラム。アレッポ大学学術交流日本センターを通じて3人の招聘を行ったこと、そして

その時には、このプログラムをアラブ世界全体に広げようという意図は必ずしも持っていなかったことがこの名称から伺える。初回の頃は、「感謝の気持ちの表し方はいろいろあってよい。今年の学生たちにとっては、それがASPであった」と考えていたのを思い出す。

日本語学習がメインであることは、当初の構想通りである。日本人学生がアラブ人学生を教え、またSFCの日本語クラスへも担当の先生の協力を得て実現した。簡単な映像の制作も行った。SFCの日本語クラスへの参加、体育の授業への参加、着付け・茶道・華道の体験などSFCの先生方やサークル、あるいはご父兄の協力を得て行うことが出来た。研究会所属学生の実家にアラブ人招聘者を泊めていただくという形で、富士山小旅行も行った。最終発表会では、滞在の印象を発表してもらった。現時点から振り返れば、第1回のプログラム内容がそれ以降のプログラムの原型をなしていることがわかる。

もう一つ指摘しておかなければならないのが、宗教上の配慮である。招聘者は3名ともがイスラーム教徒であり、受入側は、アラビア語と同時にイスラームについても学んでいる学生たちである。学びは実践されなければ何の意味もない。礼拝時間の確保、食事における豚脂・豚肉、アルコール類のチェック、さらには日本人女子学生の服装において過度の露出を控える配慮など徹底して行った。宿泊場所であるSFCのゲストハウスの各部屋に礼拝の方向(キブラ)を示すシールも第1回目から貼り続けている。

修了パーティーで訥々と読み上げられた感想文に込められていた感謝と友情、そして経緯に満ちた言葉に参加者すべての人の目が潤んでいた。それは、民族や宗教の違いなどすっかり忘れて、互いに分かり合えたことを実感した瞬間でもあった¹。こうして無事に第1回は終わった。この学生たちの頑張りは、しばらく日本を離れ、日本の若者に対して「いまどきの若い人たちは…」とありがちなことを思っていた筆者自身の認識を180度転回させるものとなった。やってもらって当たり前をしか思わないのかと思いきや、熱い感謝の気持ちを持っていて、それを形に変えて表現しようとするし、チャンス

さえあればお互いに協力し合って驚異的ともいえる力も発揮する。素晴らしい学生たちに恵まれていたのだという思いを新たにしていた。

この頃の若者も決して捨てたものではない。その頃、私の周りにいた人々は、そんな話を聞かされていた。その中の1人が、外務省の畏友、宮本雅行氏である。宮本氏とは、氏がシリア大使館で政務・文化担当書記官を務められていた頃に、大使館とアレppo大学日本センターの共催で、講演会、展覧会、日本文化週間などを開かせていただき、センターの発展に大きな力添えをいただいた人物である。日本映画のフィルムを担いで出かけたユーフラテス河沿いの町ラッカでの日本文化週間は忘れえぬ思い出である。その宮本氏が、外務省文化交流部政策課と話をつないでくれたのが、第2回のASPである。ASPは2回目にして外務省からの支援をいただけるという幸運に巡り合ったことになる。

外務省との共催ということで、シリアのみならず、他のアラブ諸国からも招聘を行うことになり、各国公館の協力を得て、エジプト、チュニジア、イエメン、レバノンの4カ国においても日本語学習者に対して募集を行うことになった。こうして第2回ASPでは、シリアからの2名と上記各国から1名の合計6名を招聘した。プログラムの内容は、第1回目を踏襲したものとなったが、宿泊先であるSFCゲストハウスのシングル部屋数である6名を受け入れる運営能力のあるプログラムであることが実証できた。また、アラブ人同士の交流の場になりうる事が確認できたのであった。また、この第2回を受けて、招聘者を訪ねるという形で、SFC側の訪問プログラムが、夏季・冬季休業中の特別研究プログラムとして行われるようになった。翌年の3月には、チュニジアに、同8月末から9月にかけては、レバノン・エジプトにASP招聘者を訪ねた。春のチュニジアでは、すでに高校の英語教師になっていたムラード・ダーミーさんを訪ねて、彼が顧問を務める日本文化クラブに所属する約100名の高校生たちと交流活動を行った。また、夏のレバノンでは、招聘者が日本語を学んでいたハリリー・カナディアン・アカデミー大学を訪問した。続いて訪れたエジプトでは国際交

流基金カイロ事務所、伝統あるカイロ大学文学部日本文学科への訪問のほか、カイロを案内していただくと同時に第2回ASP招聘者のアマーニー・カーレムさんのお宅に招いてもいただいた。

ところで、レバノン訪問中に日本大使館から紹介されたのが、セント・ジョセフ大学である。日本での交流先を探しているという。国際担当のハリール・カラム教授（現副学長）との数回の会合を経て、レバノン研究の現地受入先を探していた三枝奏さん（当時修士課程）を同大学に受け入れてもらいつつ、日本語教室を開くことで一致した。この教室の活動が、やがて、セント・ジョセフ大学学術交流日本センター（CAJAP）の設立につながり、SFC修士修了生の佐野光子氏が副所長として常駐することにより、SFCにとっては、アレppo大学日本センターに次ぐ拠点に成長していくことになる。

このように、ASP第1回と第2回は、まずは日本語研修と文化体験をメインに、とにかく感謝の気持ち、もてなしの気持ちで日本に招待し、宗教上のことも含めてまさに家族と共にいるようにくつろいだ滞在をしてもらえるかどうかにかまけていたように思う。とはいえ、最初の2年間で、海外拠点のネットワークも含めて、ASPの枠組みや方向性のかなりの部分が決まっていたと見ることができよう。

(2) 第2期：第3回、第5回、第6回（ASP2004、ASP2006、ASP2007）

第1期で原型が出来上がったとはいえ、プログラムとして問題がなかったわけではない。日本語研修のプログラムとして見たとき、そこにはまだまだ改善の余地があった。レベルも進度も異なる招聘者たちの日本語学習に対して、2週間という限られた期間で、いったい何が出来るのかという、根本的な問題である。それに一定の答えを出したのが、第3回のASPであった。

第3回では日本語スキットビデオ制作を日本語学習の中心に据えてみた。この年のASPでは、一回限りの外務省からの支援の体制からうまく移行ははかれず、募集に手間取り、国際交流基金から資金的

な支援は得ていたものの、招聘者はシリアからの2名にとどめざるを得なかった。この少ない招聘者とともにじっくりと取り組んだのが、日本語スキットビデオの映像作りであった。物語を作り、脚本を書き、絵コンテを書いて、2人の招聘者それぞれを主人公として、カメラの前で演じてもらうし、撮影も体験してもらう。この一連の作業を日本人学生たちと共にやることによって、教室での座学による日本語の学習に代えていった。この年は、小旅行で箱根を訪ねた。大涌谷から沈む夕日は美しかったが、招聘者数同様いろいろな点でスケールに欠けた年だったかもしれない。

しかしながら、その効果は思わぬところから出てきた。同じ年度の3月に研修でシリアを訪ねると、今度は自分たちが作品を用意したので、出演してほしいとその2人の招聘者から依頼があった。「アルハムドゥリッラー（すべての称讃はアッラーにある）」というアラビア語表現をモチーフにした同名の作品で、そこには「アルハムドゥリッラー」という言葉の使われる場面がコメディータッチで巧みに織り込まれている。当時アレppo大学学術交流日本センターで主幹を務めてくれていた山本達也氏（現名古屋商科大学専任講師）による映像作りの特別授業の成果もあって、見ればASPで学んでもらったスキルそのままに絵コンテや脚本が用意されていた。YouTubeにもアップされている同作品は、現在サウジアラビアを中心に8万回以上の再生回数を誇っている²。

さらに、この2名の招聘者は、その後日本への長期留学を果たすことになる。ムハンマド・ハージ・ムハンマド君は、私費留学生として立命館アジア太平洋大学で、そしてムサンナー・アルアーボ君は、文科省の国費留学生として京都大学大学院でそれぞれ学ぶことになる。第1回目の招聘者である、アスアド・アルアミーリー君も国費留学生として名古屋工業大学大学院で研究を続けている。ハージ君は再び日本に来て学ぶための勇気をASPでもらったという³。彼らが日本への長期留学を決めた背景には、ASPでの経験を通じて、日本でイスラーム教徒として暮らすことに何の問題もないことを確かめられ

たことがある。ASPのもたらす新たな効果であった。

第4回のASP（ASP2005）は、特別編となった。全体統括を務める筆者が留学期間で秋から1年間の研究休暇を取った関係と、予算が限られていた関係で、アレppo大学日本センターを設立準備段階から、事務長として支え続け、研修などの際には、まさしくアハラン・ワ・サハランの精神で、全面的な支援をして下さるアブドゥラッザーク氏を奥様とともに招待した。学生たちとの積極的な交流も果たし、SFCの現場と日本を見ていただくよい機会になった。

その年度の後半から、筆者はアレppoで在外研究を行っていたが、特別研究プロジェクトとアラビア語の現地研修は、例年通りに実施した。2月の末から行った特別研究プロジェクトでは、レバノン、イエメン、シリアの3カ国を訪問した。レバノンでは、セント・ジョセフ大学にカラム教授と佐野光子氏を訪問、イエメンでは第2回招聘者のムハンマド・ハイド君にお願いして、イエメン訪問を実施した。ムハンマド君が日本語を学び、訪問の受入先にもなっていたいただいたイエメン日本友好協会で、交流活動を行った。交流活動の最後に、次回のASPでは、友好協会の日本語学習者1名を招待すると発表し、友好協会を拠点に今後の関係が展開することになる。

そうした動きを受けて約1年半ぶりの開催となった第5回ASP（ASP2006）は、イエメンからの1名を含め、レバノンから1名、シリアから4名という久しぶりの6名の招聘となった。レバノンからの1名は、セント・ジョセフ大学学術交流日本センターからの1名である。シリアでも変化が起きていた。このころには、ASP誕生の一つの契機となったアラビア語海外研修で行われる単語と文例の収集をサポートしてくれるチューターの体制が、一層充実したものになっていた。この年には、完全に1対1でチューターがつくようになり、しかも彼らはセンターの日本語学習者の希望者の中から、面接試験で選ばれるようになっていたのである。このことによって、日本人学生とアラブ人チューターとの間は、より緊密なものとなり、日本人学生の側も、この人

にASPに来てほしいというような具体的な希望が出てくるようになったのである。シリアから4名が選ばれている背景にはそのような現地研修における変化もある。

この第5回では、第3回のラインを踏襲しつつも、6名の招聘者を受け入れる日本側にも適材適所に新しいメンバーたちが加わり、プログラム全体が生まれ変わったかのようにであった。なかでもスキット撮影には、当時すでに各地の学生映画祭で高い評価を得ていた秋山貴人君（環境情報学部2年）がカメラを回し、「サバイバル日本語」をコンセプトに、留学生が日本で文字通り生き残っていくために必須と思われるスキットを招聘者の6名一人ずつについて撮影した。交番、駅、買い物、ホテル、郵便局、レストラン。これらの場所に事前にフィールドワークに出かけ、招聘者たちにそれぞれの場所で実際に起きたことをもとに脚本を作っていた。ロケは、実際、藤沢北警察署の全面的な協力を得るなどして、キャンパス外で積極的に行われた。

この年は、映像制作がそうであったように、他の分野でも本当に積極的であった。着付け、茶道、華道の文化体験、富士山旅行、江ノ島、鎌倉、東京都内への小旅行はもちろん、湘南台小学校への訪問、秋葉台体育館でのサッカー、宮ヶ瀬ダムおよび日産の車体組み立て工場の見学にも出かけた。本当に盛り沢山の第5回ASPであった。

この年度末の3月に奥田研では特別研究プロジェクト「アラブ世界訪問プログラム」としてモロッコとシリアを訪問した。モロッコでは、ラバトとムハンマディーヤで交流活動の機会をいただいた。シリアでは、第5回レバノンから招聘者のマナール・カイさんが、セント・ジョセフ大学の日本語教室の友人2人とともに、われわれのプログラムに合流してくれた。シリア人、レバノン人、日本人が肩を並べてアレppoの街を散策した。彼ら3人が帰国する前日のミーティングで、第6回の招聘者として来日することになるニコール・フーラーニーさんが、「(ハリリー元首相の暗殺の嫌疑などいろいろなこともあるので)、シリアのことは嫌いだけれど、今回アレppoへ来て、日本人、シリア人の学生たちと一緒に

プロジェクトに参加してみて、アレppoが好きになりました」と発言した。

これについて当時の報告書に筆者は、「国家にはできないことが、アレppoという都市にはできているのである。その都市の力のほんの一部を、ささやかではあるけれどわれわれのプロジェクトが引き出している。そんな大それたことを思わされた。アレppoという都市はこんな風にして、きっと何千年の間、人々を魅了し続けてきたのであろう。改めて、この町に研究拠点をもち、この町の若者たちとこうして共同プロジェクトが行えていることの大切さを気づかされるとともに、アレppo大学との共同プロジェクトに新たな展開の可能性が示唆された瞬間でもあったように思う」と記している⁴。

こうした訪問を受けて行われたのが、第6回のASP2007である。モロッコから1名、レバノンから2名、そしてシリアから3名の招聘を行った。この年は、昨年を中心メンバーがそのまま残っているうえに、「去年以上のものにしたい」（間瀬優太君（環境情報学部3年））という思いが実行委員全体に共有されており、非常に力強いASPとなった。今やASPの活動のメインとして不動の地位を築いた感のある映像制作では、関係機関の協力のもと江ノ島ロケを敢行した。1本の作品としてもまた、6名がそれぞれ主人公を務める6つの作品としても楽しめるように工夫されたスキットは「サバイバル日本語2」としてまとめられた。

筆者にとって印象的だったのは、シリアのパーセル・カイヤーリー君が好きな言葉として教えてくれた「今までは冬が嫌いだったけれど、今は等しくどの季節も好きになった」である。つまり、数年前までは、イスラーム過激派によるアメリカ軍等に対するテロ行為を心のどこかで応援していたというのが、日本語を学び、また日本人学生たちとの交流を通じて、心が開かれ、そうしたステレオタイプのものの考え方が誤っていることに気付いたという。そして出てきたのが上の言葉。今では、イスラーム過激派を相変わらず肯定する友人たちにそれが間違いであると積極的に説得してさえいると教えてくれた。こうして日本語の学びが、そして日本人との交

流が彼を変える契機となっている。つまり、一人ひとりの変化に基づく、おそらく最も確かな平和構築に対して、ASPのみならず、SFCのアラビヤ語現地研修や特別研究プロジェクトが貢献できる新たな可能性をここに確認できたのである。

(3) 第3期：第7回、第8回、第9回、第10回
(ASP2008、ASP2009、ASP2010、ASP2011)

プログラムとしてかなり完成してきたのかと思っただ第6回の終わりであったが、まだまだ新しい展開が待ち受けていた。それが第7回ASPであった。ASPは、そもそも日本語を学ぶアラブ人たちに日本語を教えようとするところを出発点にしているプログラムである。前述のように映像制作を日本語教育とすとはいっても、日本語の授業がまったくなくなってしまったのではなかった。毎日日記をつけてもらい、それをまとめた感想を最終発表会に披露してもらおうという形が続いた後、第6回には、日記の作成とは別に、招聘者ごとにテーマを決めてチューター班でグループディスカッションを行い、それを踏まえたうえで、滞在中に学んだこと、考えたこと、感じたことなどをまとめて最終発表会でスピーチを行うという形をとっていた。ディスカッションのテーマは、事前に教えてもらっている招聘者自身の関心に近い分野から選ばれていた。そうであるならば、さらに一歩進めて、それぞれの問題関心に従ったテーマを選んでもらい、チューター班がサポートしてフィールドワークなり文献調査なりを行い、レポートをまとめ、それを最終発表会に発表してもらうのがよいのではないかと考えるに至った。

それを試したのが第7回ASPであった。シリアから2名、モロッコから2名、そしてレバノンから1名の招聘を行った。トヨタ財団から助成を受けての活動になったが、主として予算上の問題から、5名の招聘にとどまった。この5名の招聘者たちが「工学教育」「日本人のイスラーム理解」「憲法9条」「観光開発」などのテーマについてレポート作成に挑戦した。このレポート作成を円滑に行うため、オリジナルのワークブックも用意した。そしてチューターリーダーには、おおむね大学院生たちを配し、リー

ダーを中心にチューター班全体で協力し、このワークブックを手にSFC内の先生方や学生たち、場合によっては外部の専門家にまで話を聞きに出かけていった。こうして作りあげたレポートが最終発表会では、発表された。各招聘者のテーマによるレポート作成が、映像とは独立した形で、ASPのもう一本の柱になった。

この第7回に参加したシリアのフィリップ・ハムウィー君とモロッコのハッサン・ボアマル君は、レポートの作成を通じて研究のやり方を学べたことが最大の収穫であったと口を揃える⁵。フィリップ君は理系、ハッサン君は文系の学生だが、二人とも座学中心の暗記型教育の中で育ってきているということである。このレポート作成は、まさしくSFCの問題発見解決型の研究教育方法の実践である。ASPもまたこの研究教育の方法を発信するチャンネルになろうとしている⁶。

この年、映像制作については、「サバイバル日本語」シリーズを卒業し、日本語の機微に立ち入った「よりよく伝わる日本語」をコンセプトに撮影を行った。たとえば「いいですよ」という表現を取り上げ、承認しあるいは称賛するときの用法と拒絶するときの用法との混同から生じる間違いを捉えてスキット化した。「いいですよ」の他、「よくない」「どうぞ」「とりあえず」「ふるさと」という5つの作品に仕上がった。

こうして第7回ASPからは「日本語レポート」と「撮影」とがASPの両輪となっていった。

続く第8回のASP2009では、シリアから3名、レバノン、イエメン、モロッコから各1名の合計6名を招聘した。この年実行委員長に選ばれた滝川理紗さん（総合政策学部3年）は、就任の当初から「外部アプローチ」つまり、この活動のプログラム外への発信に意欲的で、この年から全体テーマを設定することになった。すでにASP2007あたりから、「大きなわれわれ」、「自分自身の変化」「学術交流の新しいカタチ」などといったコンセプトがASPの日本側の参加者の間では明確に意識されるようになってきていたため、全体テーマを設定すること自体には問題がなかったが、テーマの選定には多くの

時間を費やした。1ヶ月以上にわたる議論の末に、「アラブと平和を構築する」に決定した。

この全体テーマの設定によって、この年の撮影は、全体テーマに即したものにしようということになり、「挨拶」をテーマにした。アラビア語で平和といえば「サラーム」。その「サラーム」はアラビア語では挨拶の言葉でもあり、そもそも挨拶こそが平和構築の第一歩であるとの考えからである。「お邪魔します」「よろしくお願ひします」「ありがとう」「お久しぶりです」「お待たせしました」「さようなら」といった人間関係の基本をなす挨拶の言葉を取り上げて撮影を行った。

日本語レポートでは、一部招聘者が、日本にいることや日本語の実力のレベルとは無関係に理工系の専門的なテーマを希望し、日本人の側が対応に苦慮するという場面も見られたが、新たな学びの機会としてこれを捉え直し、招聘者の興味関心を活かしたレポートが出来上がったことは、両者の間に实际的で積極的な「平和構築」が行われた証左ではないかと思われる。「結婚から見る日本の社会」「すぐれたエンジニアとは」「携帯電話の電波が健康に与える影響」「日本における義肢制作の理念」「日本人の精神」「日本人の倫理観」という6つの作品が最終発表会で発表された。

なお、この2009年度にはこれまでのノウハウを活かしながら、新たなプログラムを開始した。「日本語若手教員研修プログラム」である。実際に現地で教鞭をとる若い日本語教師をSFCに呼んで、SFC生との交流を通じて自身の日本語能力を高めてもらうというものである。1回目は、ASP経験者でもあり、その後アレppo大学日本センターで教壇に立っているナーディーン・ジャームースさんを招聘した。

続く第9回ASP2010は、全体テーマを「ジハードを問い直す～実践型学術交流の試み～」とし、シリアから2名、イエメンから1名、モロッコから3名を招聘した。ジハードと言えばテロリズムを連想しがちの今日的な状況の中で、そうした認識を問い直し、その本来的な意味、すなわち「信仰や価値観の異なる人々との間に、よい言葉と態度で、良好な

関係を築いていくための不断の努力であること」⁷をアラブ人たちとともに見つめ直し、ASPの場で良好な関係づくりを実践していこうというのである。日本人側の参加メンバー全員が十分な議論を尽くした末、前年度の「平和構築」からさらに踏み込んだテーマが掲げられた。この年の30名を超えるメンバーたちの積極果敢さを象徴する全体テーマである。

アラビア語スキルの時間枠2コマ分を使って行われているアラビア語ディスカッションの時間では、ジハードとは何なのか、「大きなわれわれ」とは何かといったテーマについて筆者から基調報告を行った後、ジハードとは何なのか、自分にとってのジハードとは何かといったテーマについて、招聘者ごとに班に分かれて、議論とその内容の発表の機会を持った。

撮影では、ジハードが「努力」であることに着目し、「努力する人の姿」をコンセプトに6つの映像作品が制作された。映画監督と俳優の歩み寄りの努力を描いた「台詞」、困っている人に積極的に手を差し伸べる努力を描いた「つながり」、イスラームに対する偏見に対し自ら動き出そうとする努力を描いた「出会い」、仲間同士の助け合いで自信喪失している友人を元気づけようとする「仲間」、友人の勉強を助けるための全身全霊での努力を知って2人の絆が深まる「思いやり」、敬語の誤用をきっかけに日本語学習に一層の努力をしようとするアラブ人学生を描いた「挑戦」といった具合に、日常的なジハードのありようを日本人にも分かる形で描いていった。

日本語レポート作成では、「政治とジハード」「日本人は、なぜ日本語で教育を受けることが出来たのか」「日本人とのかけ橋」「人と町がよりよく生きていくには」「日本とそこでみた組織」「シリア・アレppo大学日本センターの学習者を対象とした漢字の教え方・学び方」という6つの作品が出来上がった。作成の過程では、お互いの賢明さがかみ合わず、招聘者とチューター班がうまく溶け合えなかったり、意見が食い違ったり、ときには議論が行き詰まって空中分解しそうになったり、随分とハラハラさせられたが、最終的には招聘者6名がそれぞれの担当

のチューターたちと見事にレポートを仕上げたのである。扱われたテーマは必ずしもジハードに直結したものではないが、この作成の過程において双方が払った努力こそが何よりのジハードであった。

翌2011年、日本では3月に震災が起り、アラブでは民衆革命と称される一連の動きでASPと関係の深いシリア、イエメンでは大きな人的被害が出た。3月11日、奥田研は、特別研究プロジェクトとしてシリアでの活動の最中であった。3月の時点でのシリアにおける民衆革命の波及は限定的で、アレppo大学内でもまた市内でも目につくのは体制支持の大規模な行進の方であった⁸。しかしながら、シリア情勢はその後悪化の一途をたどり、夏には毎年続けてきたアレppo大学日本フェアへの参加を活動の一つとしたアラブ訪問プログラムの実施を断念せざるをえない状況にまでなっていた。夏のアラブ世界訪問プログラムでは、その活動の中にASPの筆記試験と面接試験の実施が含まれるが、この年は、当然のことながら、それもかなわず、筆者が日本センターのアフマド・アルマンズール先生と共に行うにとどまった。

またイエメンでは募集をお願いしているイエメン・日本友好協会が国内の混乱のため閉鎖され、JICAからの先生方のみならず、現地の先生方も国外に避難されているような状況の中、募集自体を行うことができなかった。(なお、現時点ではイエメン唯一の日本語教育の場である友好協会自体の再開のめどは全く立っておらず、イエメンにおける日本語教育は存亡の危機に立たされている。)

そうした状況の中での第10回ASP2011。シリアから3名、モロッコから2名、レバノンから1名の招聘を行った。全体テーマは「SFCから始まるジハード～学术交流の10年目」となった。ジハードを問い直していたのが昨年だとすれば、その議論を踏まえて今年はいよいよ動き出そう、SFCからジハードを発信していこうという気概にあふれたテーマである。この全体テーマは、募集の段階から明確に打ち出され、志願者調書とともに提出してもらった作文のテーマにも反映された。そしてその作文の内容を活かしながら、作られたのが今

年の撮影の脚本である。

招聘者が来日し、実際に彼らの人となりに触れてからの脚本作成となったため、時間的には若干の慌ただしさはあったが、その分、例年になりにアリティが確保できたと考えている。

日本語レポートについては、「優れた救急医療システムとは」「日本人の自然観に学ぶこと～俳句を通して～」「日本企業における「カイゼン」の現状と展望」「もう一つのアラブの春～自分を変える、アラブが変わる～」「イスラームから見る日本人の思いやり」「困難に向き合う力」という6本の作品が仕上がった。これらのレポート作成の際の調査は、キャンパス内でのインタビューやアンケートはもちろん、医学部やキャンパス外の専門家へのインタビュー、企業訪問など、例年以上に多岐にわたり、各班とも最大限の時間を調査にあてていた。また、今回は少なからぬ数のチューター学生が、自らの研究テーマと重ね合わせながら調査を行っており、彼らの研究の深化にとっても有益な学びの機会となっていた。

また今回初めての試みとして、ASP6回を経験した卒業生菊池創太君が今年度から教壇に立つ神奈川県立中央農業高校(校長：上治正美先生)にて稲刈り、餅つきなどの農業体験、和太鼓の鑑賞を中心にした高校生との交流の機会も持った。

さらに今年度初めての試みとして、最終発表会を筆者の担当する「現代文化探究」(金曜4限)の1回として行った。昨年まででは、研究会の時間枠で行っていたため、研究会メンバー以外の学生の参加はほとんどなかったが、今年は、100名近い学生にも彼らの作品の発表を聞いてもらった。授業後に集めたコメントペーパーには、招聘者たちの発表のレベルの高さや日本語の上手さに感心し、彼らの信仰心の強さを肌で感じたばかりでなく、「日本についても改めて考えさせられた」「自分自身も改めて考えさせられることが多々発見できた」などの感想が寄せられており、履修者たちの変化のきっかけになるという期待を抱かせてくれた。

発表会終了後の懇談において、モロッコ日本語教師会の神尾重人先生から「6つの作品はどれも現

代社会の抱える問題を扱っていて、従来型の文化交流にはない広がりを感じる」というコメントをいただいた。グローバル化下において人類社会が共通して抱える問題を日本人とアラブ・イスラーム圏の学生がともに探究する場としてASPが歩みだしていることに気づかされた。

映像制作と日本語レポート作成のみならず、期間中のすべての活動が、全体テーマのもとに有機的につながるようになってきて、全体的なレベルもかなりの高度化が進んだ第10回ASPであったが、それに十分に比べられる、アラブ人招聘者と日本側実行委員を得て、10回目という節目の回に相応しい2週間になった。

3 「大きなわれわれ」

ところで、ASPには年ごとの全体テーマとは別に、理念が掲げられている。しかしながら、初回から第3回ASPの頃までは、理念を掲げる必要を感じることもなくプログラムの実施に追われているようなところがあったが、第3回ASPが一気にバージョンアップした第4回ASPにおいて、ASPの理念を示す必要性を感じ、当時はまず、「彼らは何者かをわかるためではなく、彼らと我々が何者であることによって共通のビジョンを描けるのか」とした。この理念の背景には、エドワード・サイードが戦後のアメリカ型オリエンタリズムにおける言語習得について行った指摘がある。彼はそれが、オリエントの文学を理解するためではなく、「重要なのは、人々が何者であり何を考えているかではなくて、彼らを何者にし、何を考えさせることが可能かという点にある」と指摘した(サイード[1986]210頁)。つまり、アメリカ型オリエンタリズムでは、オリエントを理解するのではなく、自分たちの利益に合うように作り変えてしまおうというのである。

この言明を否定しようとするれば、せめて相手が何のものであり何を考えているのかを知らなければならないということになるが、これでは、旧来型のオリエンタリズムと変わるところがない。なぜならば、違いが際立てば、人間は優劣をつけ、自分たちの方が優れているとして、相手を支配や操縦の対象にし

がちだからである⁹。問題は、相手と自分の間に線を引き、違いを際立たせることにのみ目的意識が働いていることにある。そうであるならば、違いを理解すること自体が目的にならないようにしなければならない。そこでASPでは「彼らは何者かを分かるためではなく」となる。

アメリカ型オリエンタリズムのいう「何者にし、何を考えさせることが可能か」が、何よりもずいのは、自分たちの側は一切変わらず、相手にのみ自分たちの利益に合うよう変化を求めている点である。このような形で人が同じになったところで、結局は相手に利用されるだけというそもそもの不公平を解消することはできない。となれば、大切なことはお互いに変化することによって、彼らとわれわれという区分を乗り越えた地平を獲得すること。そのことを目的にすることはやめなければならない。違いではなく、むしろ共通点を探らなければならない。しかし、「互いに人間であることを知り」とだけ表現したのでは、変化の必要性も、また具体的に何をしたらよいかのイメージもわいてこない。そこで、「彼らと我々が何者であることによって共通のビジョンを描けるのか」としたのである。

この言い方には、開設当初のSFCでよく言われていた「未来からの留学生」にヒントを得た。当時は、未来には国境も彼らが背負っている伝統もないはずであると考え、「共鳴する未来」という言い方も多用した。しかしながら、「未来の共有」という言い方は、時間軸に縛られたものであり、時間軸に縛られているものである以上、そこに力の介在が必要になる可能性が否定できないことから改良の余地を感じるに至った。また、「共通のビジョン」という言い方は、明らかに視覚に縛られており、その静的な感じも含めて物足りなさは否定できないでいた。

ところでイスラームにおける人間論では、人間には須らくアッラーからルーフ(霊)が吹き込まれており、しかも人間各人には、前から後ろからも次から次にそのルーフに光の皮をかぶせられた存在すなわち天使がついていることになっている¹⁰。天使は疲れることも倦むことも知らずにただひたすらにアッラーの命令に従う¹¹。ルーフのままに生きる

はそういうことである。人間もルーフのままに生きられれば、まさに天使のような生き方が可能になるが、人間は土の皮、つまり肉体をかぶせられていて、自らを養わなければ生きてはいけない。その意味で人間は、個体に固有の欲求から解き放たれることはない。したがってルーフのままに生きることはできないのだが、しかしこの欲求が欲望に転じると、ルーフの働きはいっさい外に出て来なくなってしまう。須らく人に吹き込まれているにもかかわらず、彼を支配するのは、肉的な欲望のみということになってしまう。自らの虚しい願望を神とする状態である。

しかしながら、人間がすばらしいのは、肉的な欲望に支配されながらもなおアッラーの命令に従って生きようと意志ができ、実際に行動ができるという点である。アッラーが天使ではなく人間を地上の代理人に選んだ理由の一つはこの点にある。なおここでいうアッラーの命令とは、人間が死に至ることから逃れられないと同様に、あるいはそれ以上にそれだけからは逃れることができないという種類の命令、つまり真理のことである。人間の欲望は、しばしばそうした真理を無視して他人を傷つけ自らをまた荒廃に追い込んできた。自分の利益に合うように他人を変えようとする企ては、まさに欲望のなせる技なのである。

しかしもしも人間が従うべきを自らの欲望や虚しい願望に凝り固まるのを抑え、それにしがみつくことを止めたとき、人間に吹き込まれたルーフはその光を放ち始め、同じように欲望から自らを解放した人々から放たれる光と、その人たちの間に幾重にも重なっている天使たちを媒介につながることが可能になる。欲望によって遮られ、彼らとわれわれの境ばかりに気を取られていた人間たちが、人間同士のつながりを取り戻すことができるのである。こうして成立する「われわれ」は、人種、宗教、国籍、文化、伝統、あるいは一人ひとりが置かれている状況、さらには生きていくか死んでいるかあるいはこれから生まれてくるかといったことに隔てられ、囚われるのではない、人間同士としての「われわれ」である。この意味での「われわれ」を「大きなわれわれ」と呼ぶことにし、ASPの理念にも、これを組み入

れていこうと考えるに至った。

もちろん「大きなわれわれ」と唱えるだけで、人間としてのつながりが取り戻せるのであれば誰も苦労はしない。まずは、一人ひとりがルーフを吹き込まれた者であること思い出さなければならないし、そのことを知らないのであればそれを知ることから始めなければならない。ところが、ルーフについての知識は実は僅かにすぎない¹²。知識が僅かであるということは、むしろ行動によってそれを確認できるという側面があることを意味する。ここに欲望の虜としてではなく、地上の代理人としての人間性を取り戻そうとするならば、行動、実践といったものが求められることになる。

しかし実践が求められるといっても、何をすればよいのかは明らかではない。ルーフによってそれだけには逆らうことのできない命令を受けることができるのであるとするならば、それだけには逆らうことのできない命令、つまり真理が何であるのかを探究していくことが実践の指針を与えてくれるはずである。真理の探究とは、宇宙をも包み込む大きな存在の有する「知」の探究であり、その大きな存在は光の速さをも超えて存在するのであるから闇をも照らし出す光の探究であろう。それは、人間の分析的な思考と視覚に縛られた科学的な知よりはるかに大きな知である。こうした真理、知、光を探究する行為は、人間同士の差異を明らかにすると同時に、それを乗り越えさせてもくれる。「大きなわれわれ」の立つ地平である。

この意味で人間同士のつながりを実現しようとするASPの活動は、真に学術的なもの、つまり大きな存在の真理、知、光の実践的な探究を軸とするものでなければならないのである。こうした考慮を経て、現在使われている理念、すなわち「彼らが何者であるのかを明らかにするとどまらず、彼らとわれわれがお互いの変化を通じて、いかにしたら「大きなわれわれ」になれるのかを実践的に考える」にたどりついたのである。

こうした理念に鑑みたとき、まず求められるのが自分自身の変化である。クルアーンでは、天使が前にも後ろにも次から次と重なって人間についている

ことを指摘した後で、人が自分自身を変えない限り、アッラーはその人の属する社会を変えはしないと教える。「本当にアッラーは、人が自ら変えない限り、決して人々(の運命)を変えられない。だがアッラーが(一度)人々に災難を下そうとお望みになれば、それは決して避けることが出来ない。彼らには、かれの外に守護者はないのである。」(雷電章 11)。求められているのは一人ひとりの変化である。

その意味で、第9回、第10回のASPの全体テーマが「ジハードを問い直す」「SFCから始まるジハード」となったことは、示唆深い。そこには、第9回で大ジハードとしてのジハードの本来の意味、すなわち「価値観や宗教の異なる者に対して、相手の差異を十分に認めつつ、よい言葉とよい態度でよい関係を築こうとする不断の努力」を理解し、それを受けて第10回では、実際にASPの活動を自分たち変化を目指すジハードとして行ってみようというメンバー全員の一致した決意が表明されているのである¹³。ASPは、初回まだ「文化交流」と称していた頃から10年の年月をかけて、一人ひとりが自分自身を変える不断の努力を実際に行おうというところまで成長したのである。これは、もっとも基礎的だが最も難しいガバナンスの基礎を築く試みであると同時に、それだけには決して逆らうことのできない大きな存在を認め、その「知」を明らかにしつつ、実践を行うという意味でイスラーム学の実践形態の一つであるとさえいえるのである。

4 人をつくり、絆をつくり、世界を変える

SFCの進める問題発見解決型の研究教育は、特定の学問領域や方法論に捕われない総合性と、理論のレベルであれ現実のレベルであれ問題を明らかにするにとどまらず、解決の道筋を具体的に示していくという実践性などに特徴づけることができる。しかも個別具体的な解決は、そのケースにとってのみ最適であればよいのではなく、その事例にとっても、そしてそのケース以外の全体にとってもよいものでなければならないという総合性も求められる。その意味において、世界全体が共有できる、あるいは共有すべき何かが一方で意識されながら、問題発見解

決が行われる必要がある。

たとえばグローバル化をとってみても、それが、特定の国家や組織の利益のための収奪行為が国境を超えて広がることとするならば、それを世界中が共有することは難しい。安全保障のためであれ、自由貿易のためであれ、グローバル化が進行する過程において、生命を奪われ、生活を奪われて退場を余儀なくされる人々が後を絶たないような状況の中で、その意味においてのグローバル化を全面的に肯定することは難しい。つまり、グローバル化下においては、かつてない圧倒的な支配／被支配への関係の再編成が起こっているのである。しかしながら、歴史を戻すことができない以上、こうした状況を受け止め、これを乗り越えていかなければならない。

植民地主義の時代であれば、あるいは文明の衝突だけが問題であるような状況であれば、支配の対象が何者であり、何を考えているのかを明らかにし、あるいは自分たちの都合のよいように何者にし、何を考えさせればよいのかを扱う地域研究に意味があったであろう。しかしながら、そうした研究がある特定の国や組織あるいは制度や主義の利益に結びついたものであるならば、そこに、世界全体が共有できる何かが見出される道理がない。自分と異なる者たちに対する理解は、必須である。異なる者たちを異なるという理由だけで排除することが許されないのは自明のはずだが、異なることの理解が操縦や統合のために用いられてもいけない。異なることへの理解は、その相違を支えているものを明らかにし、そのうえで異なる者同士が協力し合えるものが何であるのかの探究につながっていかなければならない。

人々は人種や民族によって分かれている。言語も違えば、文化も違う。しかも、そうした違いがあればこそ、人々はお互いに知り合うこともできる。しかし、その違いは、優劣を決めるためのものではない。人種によって、民族によって、あるいはたとえばその人が持てる者か持たざる者かというような状況によって、人の間が区別されてはいけない。むしろ、この違いを活かし、かつ正しさと価値を共有しながら協力をしていくことが求められている。人と人を区別することがあるとするならば、それは人々

の間の違いだけではなく、たとえいかなる状況においても共有できる部分についてどのくらいそれを意識できているか、また忘れずに行動できたかどうかではないだろうか¹⁴。

人間は必ず死ぬこと、宇宙が存在すること、地球がこうしてわたしたちの生活の場になっていること、これらの事柄について考えるのをやめることは自由だが、しかし現実の問題としてわたしたちは誰一人としてそこから逃れることができない。そこには、逃れることのできない何かが存在しているということなのである。

SFCの問題発見解決の軸の一つにガバナンスがある。ガバナンスは、できるだけ権力を集中させず、他の誰かからの支配によらず、自発的な協力によって成り立つ、自律的な人と人とのつながりということもできる¹⁵。圧倒的な支配／被支配への再編成が行われている現状において必要性は高い。逃れることのできない者が何なのかについて共通の認識が持てれば、人が自ら動き出すことも可能である。つまりガバナンスの基礎は、人々が逃れることのできないものは何なのかの共有から始まるということもできるのである¹⁶。

その意味において、実際にASPのような活動は、アラブ・イスラーム圏の学生たちとの交流を通じて、ガバナンス的な人と人とのつながりを構築しようとする点において、SFC的なものといってよい。ASPにかかわる学生たちは、ASPの2週間以外は、一人ひとりの問題意識に従って、それぞれの問題解決を目指しながら、アラビア語を学び、イスラームを学び、聖典を読みながら、フィールドワークも行う。そんな彼らが日ごろの研究の成果も踏まえながら、自律的な人と人とのつながりの構築を実際に行っていく。またそこには日本人同士あるいはアラブ人同士のよい関係の構築も行われる。特に「アラブと平和を構築する」という全体テーマを掲げた第8回ASP2009では、実行委員の数がこれまでで最高の42名を数え、実行委員の間の「平和的関係」の構築が問われもした。ASPがガバナンス学の実践の場でもあることを意識する契機にもなった。

今年、日本は東日本大震災に見舞われ、一部のア

ラブの国々では民主化に対する政府の弾圧に見舞われ、双方で多くの命が奪われた。われわれは、自然の力の猛威、国家の力の暴走を前に、ただただ恐れ戦いてもいられない。それは、たまたま今回われわれの身に降りかかってきただけのことで、世界を見渡せば、人間は常にこうした猛威、脅威に晒されているのである。災厄に見舞われたときに助け合うことはもちろんだが、災厄に見舞われていないときにもまた、普段から協力の関係を築いておくことが重要である。ASPの活動は、自然の脅威に晒され続けている人々と、自然の脅威をもたらす神の教えが書かれた聖典の言語を日常的に使っている人々との間をつなごうとするものである。

交流活動を通じて、自分自身の変化が促され、人と人とが「大きなわれわれ」を基礎にしながらつながっていく。それはグローバル化のみならず、大震災なども包み込む人と人とのつながりを作り出す試みである。

2011年11月は、奥田敦研究室にとって忙しい月となった。第10回のASPが修了するとすぐに10周年の記念行事を行ったからである。慶應義塾大学創立150年記念未来先導基金からの助成も得て、過去の招聘者の中から20名の参加を得て、11月22日の23日の両日にわたって、ディスカッション、レセプション、国際シンポジウム、記念の夕食会を開催した。ディスカッションでは過去の招聘者と現役の学生が意見を交わし、レセプションでは、10年分の記録映像を見ながら、10年間を参加者の感想とともに振り返ることもした。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの研究発表大会であるオープンリサーチフォーラム(ORF2011)にて開催した国際シンポジウムでは、筆者の基調報告と記念の記録映像の上映の後、シリア学術交流日本センターのアフマド・アルマンスール副所長、モロッコのムハンマド5世大学で日本語を教え、ASPに多くの優秀な学生を送ってくれたモロッコ日本語教師会の小林裕美先生の他、アラブ側日本側の過去のプログラム参加者など8名に登壇いただいてパネルディスカッションも行った。

この記念行事の期間を通じて、ASPのこれまでと

これからについて実りの多い意見の交換ができた。ASPは、多くの招聘者たちに新たな気づきと学びの場を与え、人生の転換点にさえなっていた。記念行事に向けて提出された日本人学生からのレポートでは、ASPが、新たな学びの場、挑戦の場、発見の場、気づきの場、大きな変化の場、つながりの場、自立の場、努力の場、成長の場などとして捉えられていることが明らかになった。記念行事には、日本側・アラブ側の双方からこれまでにASPにかかわった60名を超える人々が集まり、「アハラン」の精神そのままにお互いを家族のように思い合う大きな輪が出来上がっていた。またこうして10回という回数を重ねることができたのも、送り出す側があつたこと。歴史的にも、地理的にも、あるいは言語的にも決して近いと言えないアラブ諸国で日本語教育に日々邁進する先生方の地道な積み重ねがなければ、募集自体をかけることができない。そして、招聘者たちとともに現地で学び、ASPに多くの関心を払ってくれているたくさんの学生たちもいる。ASPの輪はこうした人々との間にも確実に広がっている。そこにあるのは、新しい交流を通じて築きあげられようとしている新しい在り方のつながりである。一人ひとりが変わり、つながりができれば、社会の変化にもつながる。

このようにみていくと、当初は日本語研修、文化交流としての色合いが強かったASPが10年を経て、グローバル化の進行する世界の中で学術交流を通じて行う「人をつくり、絆をつくり、世界を変える」試みに成長してきていることがわかる。

5 これからの10年に向けて

このように「人を作り、絆を作り、世界を変える」試みとしてのASPは、これまでもアラブ人日本人を問わず、参加者一人ひとりの変化の契機となり、「大きなわれわれ」としての人と人とのつながりの構築を通して、ささやかではあるけれどアラブ・イスラーム圏と日本との間に新しいつながりを作らせていただけてきた。感謝の気持ちを表したい一心で文化交流による日本語研修として始まったASPではあったが、10年という月日を経て、それが「世界

を変える」ことへつながる試みたりうることが明らかになってきたのである。

そうした状況の中で、新しい試みも始まっている。アレppo大学では、2010年秋に、慶應義塾大学との密接な連携のもと日本研究大学院(修士課程)が開講し、2011年2月から3月にかけて、慶應義塾SFC側から、ASPでも長年にわたって日本語教育について協力をいただいている重松淳先生をはじめ、武藤佳恭教授ら4名の教員が派遣され、3月の奥田研特別研究プロジェクトでは、活動の一環としてSFC生が現在の日本社会に関するプレゼンテーションも行った。他方、SFCにおいては、SFC研究所に「日本研究プラットフォームラボ」が設立され、「日本について、日本とともに、日本において」研究する「新しい日本研究」プロジェクトが開始され、3つの重点研究とグローバルネットワーク構築とが始まっている。さらにGIGAの開講や未来創造塾の構想などもあり、グローバル化へ向けての環境づくりが加速しようとしている。

奥田研では、11月の末から3週間にわたって、アレppo大学側からの成績優秀者3名の集中フィールドワークを受け入れ、日本研究プラットフォームの協力も得て、日本人のチューターたちとともに、文字通り集中的な調査を実施した。ASPの過去の招聘者でもある彼らは、ここ1年余りアラブ民衆革命の動きに翻弄され、混迷を極めたシリアの立て直しを担っていく若者たちであり、研究テーマは「教育」「技術」「政治」。いずれも自分をそして自分たちの国や社会を変えるために日本の実践にヒントを得ようとするものである。ASPからの拡がりを感じざるを得ない。

もちろん、ASPが10年続いたからといって世界が変わるわけではないし、今後もただルーティーンとしてプログラムを開催し続けたところで、世界が変わると思えない。これまで以上に、参加者一人ひとりの変化に基づくプログラムの成長と深化があつてはじめて、ようやくその目的に近づきうるのだと思われる。このプログラムに終わりはない。これまでの実績を踏まえつつ、また、湘南藤沢キャンパスの特性を生かしながら、人材ではなく人物とし

ての人づくりを一層進め、様々な違いを受け止め、壁を乗り越えたところで絆づくりを一層深めていくことはもちろんのこと、自分自身の変化を基礎とした世界を変える活動へのさらなる展開が求められるところである。

SFCにおけるアラビア語教育にとどまらず、ガバナンス研究そしてイスラーム研究の実践型として、ひいては大学高等教育における問題発見解決型の研究教育の一つのモデルとして、ASPのプログラムの真価が問われるこれからの10年になりそうである。

〔付記〕

10回にわたり、本プログラムにご理解とご支援をいただいたすべての皆様、関係諸機関に衷心より御礼申し上げます。

注

- 1 『ASP シリア人学生歓迎プログラム 2002年度活動報告書』慶應義塾大学 SFC 奥田敦研究会 I、2003年、p.61。
- 2 http://www.youtube.com/watch?v=oNCW6gN00_w
- 3 『ハヤート』第2号、慶應義塾大学奥田敦研究室、2011年、p.15。
- 4 『第6回 ASP アラブ人学生歓迎プログラム 2007年度活動報告書』(奥田敦監修)、慶應義塾大学 SFC 奥田敦研究会 I、2007年3月、p.59。
- 5 ASP10周年記念行事の一環として2011年11月22日に代々木のオリンピックセンターで行われたグループディスカッションにおける感想。
- 6 ASP参加後に日本への長期留学を果たした学生は、2011年10月の時点で10名を数える。
- 7 ジハードの概念については、奥田[2006 b][2008]を参照。
- 8 この辺りの状況については、「緊急座談会「アラブの民主化の現状と展望」、『ハヤート』、第2号、2011年、pp.2-11に詳しい。
- 9 「オリエンタリズムとは、われわれの世界と異なっていることが一目瞭然であるような世界を理解し、場合によっては支配し、操縦し、統合しようとさえする一定の意思または目的意識そのものである。」(サイド[1986]、p.40)
- 10 聖典クルアーンには、「各人には、前からも後ろからも、次から次に(天使)が付いていて、アッラーの御命令により監視している」(雷電章11)とある。
- 11 聖典クルアーンには、「天と知の凡てのものは、かれの有である。またその側近にいる者(天使)は、かれに仕えて高慢でもなく、疲れも知らない。かれらは毎日毎晩かれを讃え、休むことを知らない」(預言者章19-20)、「かれらはアッラーの命じられたことに違犯せず、言い付けられたことを実行する」(禁止章6)とある。
- 12 聖典クルアーンには、「かれらは聖霊に就いてあなたに問うであろう。言ってみよう。『聖霊は主の命

- 令によって来る。(人びとよ)あなたがたの授かった知識は微少に過ぎない。』(夜の旅章85)とある。
- 13 ジハードと「大きなわれわれ」の関係については、奥田[2008]を参照のこと。
 - 14 イスラームの教えによれば、人々は部族と種族に分けられてはいるが、それは競い合い、争い合うためではなく、お互い知りあうためであり、言語も衣服も異なるものにされているが、篤信という衣装こそが最もよいものなのであり(高壁章26)、正義とこの敬虔さによって人々の中の協力は行われなければならない(《寧ろ正義と篤信のために助けあって、信仰を深めなさい。罪と恨みのために助けあってはならない》(食卓章2))、人と人とを区別するものがあるとするならばそれは唯一敬虔さによるのみであり、しかもアッラーの御許において最も貴いのは、敬虔さにおいて最も優れた者なのである。《人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中最も主を畏れる者である。本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通曉なされる。》(部屋章13)
 - 15 イスラームとガバナンスの関係については、奥田[2006 a]を参照のこと。
 - 16 アッラーの唯一性に基づく世界観(タウヒード的な世界観)の共有を指す。

参考文献

- 日本ムスリム協会編『日亜対訳注解聖クルアーン』、2000年。
 エドワード・W・サイド『オリエンタリズム』(板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳)平凡社、1986年。
 奥田敦[2011]「現地研修から始まる実践的教育」、『IDE 現代の高等教育』、第530号、2011年5月、pp.13-18。
 奥田敦[2008]「「われわれ」にとってのジハード」、『沖繩法制研究』、第11号、2008年、pp.15-44。
 奥田敦[2006a]「イスラームとグローバル・ガバナンス」、野村・山本編『グローバル・ナショナル・ローカルの現在』、慶應義塾大学出版会、2006年4月。
 奥田敦[2006b]「イスラームにおける正しい戦い」、山内進編『「正しい戦争」という思想』、勁草書房、2006年4月。
 奥田敦[2005]「アラビア語～交流を重視した総合的言語教育の可能性」、平高・古石・山本編『外国語教育のり・デザイン』、慶應義塾大学出版会、2005年9月、pp.149-159。
 奥田敦監修『第1回 ASP シリア人学生歓迎プログラム 2002年度活動報告書』、奥田敦研究室、2003年。
 奥田敦監修『第2回 ASP アラブ人学生歓迎プログラム 2003年度活動報告書』、奥田敦研究室、2004年。
 奥田敦監修『第3回 ASP アラブ人学生歓迎プログラム 2004年度活動報告書』、奥田敦研究室、2004年。
 奥田敦監修『第6回 ASP アラブ人学生歓迎プログラム 2007年度活動報告書』、奥田敦研究室、2008年。
 奥田敦監修『第7回 ASP アラブ人学生歓迎プログラム 2008年度活動報告書』、奥田敦研究室、2009年、および同ダイジェスト版。
 奥田敦監修『第8回 ASP アラブ人学生歓迎プログラム 2009年度活動報告書ダイジェスト版』、奥田敦研究室、2010年。
 奥田敦監修『第9回 ASP アラブ人学生歓迎プログラム 2010年度活動報告書』、奥田敦研究室、2011年、および同ダイジェスト版。